

キャリアデザインの時代(その三) : キャリアデザイン学への模索

小門, 裕幸 / KOKADO, Hiroyuki

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

51

(終了ページ / End Page)

65

(発行年 / Year)

2010-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007568>

〈研究ノート〉

キャリアデザインの時代（その三）

—キャリアデザイン学への模索—

法政大学キャリアデザイン学部教授 小門 裕幸

はじめに

毎年授業を行う度にキャリアデザイン学とはと自分に問いかけている。その問題意識を高めるために、研究ノートとして書きつづり、07年度から『キャリアデザインの時代』と題して本紀要に掲載をお願いしてきた。本稿はそのシリーズの第三弾である。本稿では、この間、熟成させてきたキャリアデザイン学について私なりの考え方をまとめてみたい。あくまでも試みであり、各位の今後の議論の叩き台として参考に供するものである。

また、学生諸君に対しては当学部で学ぶに当っての一つの考え方を提示しているものである。

第I章で「日本人の個の自立・自律問題（前門の虎・後門の狼）」を扱う。本研究ノートの（その一）、（その二）で取り上げた日本人という個についてのその後の私の着地点を示すものである。第II章ではキャリアデザイン学を考察する上での、あるいはまたキャリアデザイン学部で学ぶということを考察するための頭の整理として『大学での学び』と題して書いてみた。そもそも日本の大学での学びとは何か。今の時代が求める専門性について考えてみたかったからである。第III章では、今現在とりわけ若者の人格が揺らいでいる危機的状況のなかで、キャリアデザイン学への挑戦が重要な課題であるとの確信を得つつあることもあり、僭越ながら、敢えて一つの考え方を提示した。表題の通り『キャリアデザイン学への模索』である。

I. 日本人の個の問題（前門の虎・後門の狼）

(1) リスク社会・プレカリティへの突入

我が国は明治以来の大きな節目を迎えている。とりわけ、グローバル化という現実に対し精神構造的に過去を総括する決断を迫られている。それは、宗教改革を経て啓蒙主義の時代を悩み抜いた欧米社会の労苦に匹敵する文化革命でなければいけないと、私は考え始めている。

文化一元の同質社会であることを優先しがちな日本。民族学の権威柳田国男は、「日本人は良い意味でも悪い意味でも突出を嫌う。平凡・平穩であること、つまりは普通であることに価値を共有していた」という。戦後という時代は日本人の地域共同体を崩壊させた。平成という時代は大企業共同体をも蝕みつつある。良きにつけ悪きにつけかろうじて日本の良識ある核家族的共同体が若者を守っていたが、その基盤も崩れつつある。大都市東京に群がる若者は、厳しさをまず経済社会で大人になることを受けつけず社会的モラトリアムの世界でサブカルチャに浸り安住する。そして社会のメインストリームたる就職という人生初めての巨大な壁を前にして呆然と立ちつくすものが太宗を占める。ハイエクがいう職業選択という人間としての最大の労苦に対し、それにチャレンジするには個がひ弱で成熟していない。ゆたかで競争を忌避し優しくかばい合う社会環境の中で、

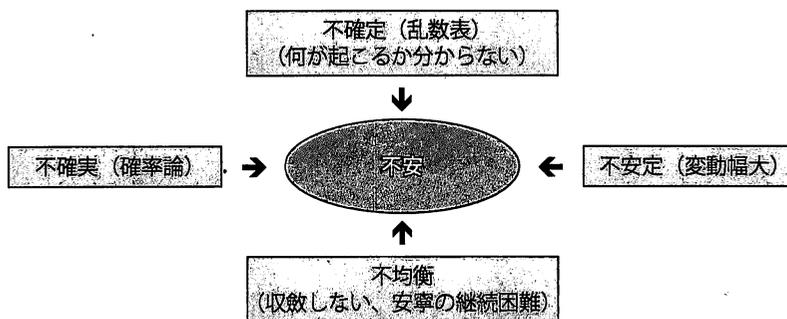
男は内にこもり、女子はきらびやかに軀を飾るモノ志向に走る。出現すべき自我は沈潜し倫理や思想の世界とは無縁の、知的には怠惰で心理的には個が液状化する危険を孕んだ社会にむかっているようにもみえる。

一方で、個の自由度が拡大し自己を相対化し、個の主観性が担保される時代になっている。欧米的に捉えれば、遅ればせながらではあるが、物質文明から目覚めてこころ（精神）の文化形成の重要性に気付き始めている。それは、欧米のモダニズム文化（精神）を社会の射程に入れんとするもがき、ともみえなくもない。いずれにせよ、平成の黒船を正面から受け止め、内向きに閉塞するのではなくて、日本という「くにのかたち」、日本人という世界にまねなる存在について、とくと再考すべき時にきている。

さらに、グローバル化という現実が、我々にそ

の回答を急がせている。グローバリゼーションの深化が、不確定で（決定論ではなくて確率論の世界へ）、不確実で（何が起こるか分からない乱数表の世界へ）、不安定で（変動幅の増幅）、不均衡な（変数過多で均衡解不定；収斂しない、安寧の継続困難）世界に我々を追い込んでいようだ。リスク社会、あるいはプレカリティといわれている社会の登場である。偉大な社会学者ブルデュの指摘の通り、個は圧倒的な不確実性を前にすると、計画を放棄し行動も起こさない²⁾。個は凍結してしまうのである。欧米ではこころの寛容・包摂（inclusivity）、感情移入（empathy）そして、つながり（rapport）に不安解消の抛り所を求め始めた。実は我々はそれをキャリアデザインというやり方で一つの解を出そうとしているのではないか。

(図1) リスク社会



(2) 日本人の個の問題（自立・自律を巡る前門の虎・後門の狼）

日本人は、この大きな時代のうねりのなかで、良さでもあり欠点でもある日本的 DNA、丸山真男のいう日本人の持つ古層と正面から対峙し、一人ひとりが個を認識し、自分のことは自分で考えざるをえなくなっているのではないか。世相的にも、それを容認しているようだ。個が強く生きることを鼓舞し激励し、同時に個に癒しを与えるような唄が巷で人気を博している。自立・自律した個が、直接、組織や社会・国家・国際社会にコ

ミットメントする仕組みの構築が、司法改革の議論などの指摘の通り緊喫の課題であり、強く求められているのである。それはとりもなおさず、個においては、自由で爽快に行動でき暖かなつながりの中で自分の役割を見つけ出し生きがいを感じる社会をつくることであろう。それは、キャリアデザイン的には、個々人が自らの力でキャリアの選択を行い自分の人生は自分でつくっていく社会であり、その個には強い意志と決意が求められているのである。これをギデンズ風（学部紀要参照）に言い換えるならば、日本人は再帰的に新し

い個を形成することが求められているのである。

しかし、我が国の現状を前提とすると、看過し得ない問題が三つある。一つは、欧米では既にポストモダンの議論が進行し、既に日本に上陸し思想的には定着していることである。個が近代合理性に抗し始めて久しい。彼らの心の揺らぎは許されるが、今の日本人はそれに安易に飛びつくことを許す状況にあるのかという問題である。二つめは、今なお、我々にとって個の尊重や個の尊厳を基盤におく自由や民主主義という概念が未だ消化できていないということである。個がそれぞれ確たる基盤を持たずしてグローバル経済を生き延びることができるのかという問題である。グローバル経済は人材の市場化を急速に推し進める。浮遊する日本の若者は個の自律を経ずしてプレモダンの状態からいきなりポストモダンの状態へ放擲されるのではないのかという懸念である。個の真の自由や社会の仕組みとしての真の民主主義は引き続きお飾りのまま放置されることになるのであろう。司馬遼太郎曰く「農奴的存在から我々はなお脱却できない」(『前門の虎』)のである。都市で働く個には自分の人生は自分で選択したいと考える人たちが増えているようにみえる。しかし、一方で、彼らの心は悩み傷つき病み始めている。強くやりたいが、根がひ弱なのである。潜在的鬱病患者が急増している。集団に守られていた個が突如そこから放逐される。さまよい、鈴木謙介の言葉を借りれば個が液状化して狂い、アキバ加藤事件に至る。三つめは、そもそも、個の自由や自立に相反する根深い日本文化、丸山真男のいう日本人の古層が存在することである。物理的なムラという共同体は崩壊しても、集団主義のDNAが払拭されていない。我々は、それをどのようにして打ち破り、従属・恭順という生き方ではない、対等な人間関係を構築して、自立的個を形成できるかという問題である。経済学者 ハイエクの言葉を借りれば自由を得た個が(職業)選択という労苦に対しどのように立ち向かうことができるのかという問題である。

図2は小池靖³⁾のチャートにヒントを得て作成

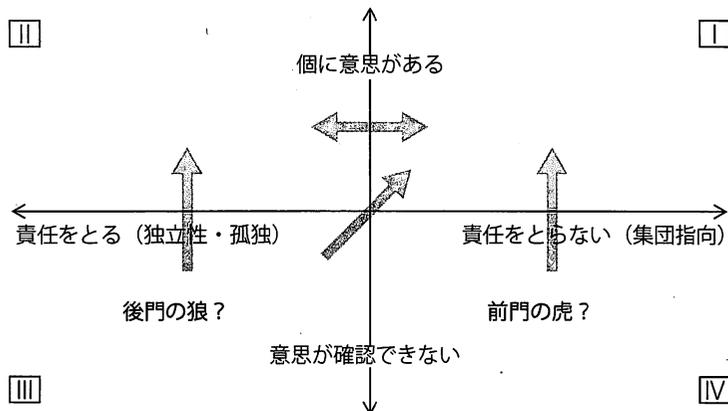
したものである。横軸に個の責任の存在、縦軸に個の意思の存在をとっている。個人として一人で責任をとることができるのか、自我が目覚めているのか、自分を本当に自覚できているのかで、四つの象限を切ってみた。

我々日本人は、とりわけ若者はⅢ象限(後門の狼)、Ⅳ象限(前門の虎)に囚れの身になっているのではないのか。欧州社会はⅣ象限からⅠ象限をかすめてⅡ象限に移ったように思われる。ポストモダンの議論はⅡ象限からⅢ象限への突入を企図している状態、あるいは既に自主的にⅢ象限を選択している状況だと理解している。大企業志向の日本の若者はⅣ象限からⅠ象限を目指している。集団から放逐された若者はⅢ象限にいる。彼らは、自律し自主的な選択によりⅢ象限に入る欧米のポストモダンの人たちではなくて、孤独となりやむを得ず自分で責任(自殺・アノミ状態)を取るしかない哀れな若者達である。我々は彼らをⅣ象限からⅠ象限へ引き上げること、あるいは、Ⅰ象限にいる有為な若者を、組織内のリーダーシップをとれるように、あるいはグローバルな場でも戦えるように、限りなくⅡ象限に片足をかけるように誘導しなければいけないのであろう。もちろん、日本人の中でも起業家や自営する個人事業主はⅡ象限にいると考えられる。ベクトルの方向は虎と狼に捕らわれの身となっている若者を誘導すべき方向を示している。

ときおりしも、日本は政権交代を実現した。大きな政府への舵をきった。またぞろ巨大な集団至上主義に逆流するのか、社会が混迷するからこそ自由で自律した個を打ち立て新しい社会に断固として誘導することができるのかが問われている。それは、エコノミックアニマルといわれたまま消えゆく日本(Japan fading)となるのか、はたまた、日本の若人が象限の大きな壁を果敢に取り払って新しい未来を切り開くことができるのかということである。それはとりもなおさず、個において自由に伸びやかにそして真剣にアサーティブ(良い意味での自己主張をすること)により良いキャリアデザインを希求することができるかどうか

かということでもある。

(図2) 若者はどのような個を目指すのか



II. 大学での学び

そもそも我々日本人が受けてきた教育とはどういうものであったのか。大学に入って学問をするとはどういうことなのか。どのような学問があり、それはどのような目的や経緯で成立したのかを考察し、また、大学で教養を身につけると日本人はいうが、それはどういう意味なのかを、まず考えてみたい。

(1) 戦後教育

まず戦後教育の原点を振り返る。戦後、米国式の教育制度が走り始めた1949年、教育界の重鎮であり吉田首相を支えた慶應義塾塾長小泉信三⁴⁾は、イギリスの学校生活をビビッドに描いた池田潔著の「自由と規律」の初版の序において、新教育制度に関して次のように率直な意見を寄せている。

我が六三制といふものは、兎も角も形は整ひかけている。これを採用するに当たって、政府当局者に、ひいては国民一般に、はなはだしく用意と思慮とが欠けたことは、今更言つても致し方ないが、ことにこの制度に盛るべき教育内

容については、そこになお幾多の問題がのこされておられ、今後他国の経験に学ばなければならぬことが無数にある。外国の大学についても吾々ははなはだ知らないが、ことに大学以下の学校教育の実情について一層の無知を自ら感ずる。特に知らねばならぬことは、世界の健強なる国民が、大学以前の青少年に、人間の尊貴とその義務の重きことをいかに教へ、彼等の道義心の涵養と道徳的勇氣の鍛錬とをいかに行ひつつあるかといふことである。附け焼刃でない民主主義の確立は、ここから出発しなければならぬ⁵⁾。

また、戦後の思想界をリードした思想家丸山眞男は、近代日本の学問の受け入れ方に関して、個別化・専門化された、統合されないタコツボ的特殊社会を生み出したとして、強い懸念を表明した。

日本が明治維新後欧州の学問を受け入れたとき、彼の地では学問の専門化・個別化がはっきりとした形をとるようになっていた。そして、日本の大学制度においては、学問の細分化・専門化が当然のこととして受け取られた。しかし、欧州の学問は細分化・専門化の根っ子には、紆余曲折は経ているがギリシャ中世—ルネッサンスと千年

を超える共通の脈々と受け継がれてきた学問的基盤があって、そこから分岐していったのである。丸山のいうササラ型の欧米の学問体系がそこにある。日本はその共通の根の部分の切り捨てて、ササラ状の上の端の方の個別化された形態のみが移植され、それが学部や学科の分類となった。日本のアカデミックな学問の存在形態は始めから技術化・専門化された学科というものであった。それは、和魂洋才や東洋の徳・西洋の技術といった二分法をイデオロギー的に受け継いだ明治の国家体制には都合がよかった。従って、学者は、個別化された学問の専門家であることが当然の前提になってしまい、欧米の学問の根幹とも言える思想や文化から独立・分化した、技術化・専門化という狭い学問の枠のなかにスッポリはまってしまった。結果、日本の学問研究者は、欧米のように相互に共通のカルチャーやインテリジェンスでもって結ばれることはなく、それぞれが別々に専門性をほり下げ、それぞれのおやまの大将を仰ぐ学会が乱立し、それぞれがタコツボ状態になっている。欧米では文化系・理科系という区分もない。日本では自然科学者と社会科学者との間の「本質的に同じ仕事をやり同じ任務をもっている」というような連帯意識は乏しい。社会科学、たとえば法律学、政治学、経済学というような本来密接な関連をもつ学問分野の間でさえコミュニケーションがあまりなく、哲学というものは本来諸科学を関連づけ基礎づけることを任務とするものであるが、日本では、事実として、哲学自体が専門科目化し、タコツボ化した。欧米では、ヘーゲル哲学が、法律学・歴史学・社会学の上で非常に大きな影響を及ぼしたのに対し、日本の独創哲学といわれる西田哲学は社会科学の各分野を基礎づける原理としては認知されなかったのではないか⁶⁾。

また、欧州に留学した歴史学者、阿部謹也も、日本の近代化過程で登場した教養という言葉に疑問を提示している。すなわち、教養の定義のほとんどは西欧社会の特定の時代に成立した個人の生活態度を意味するもので、きわめて狭いもので

あった。教養がある人とは多くの書物を読み、古今の文献に通じている人を指す。従って、その人は世の中をよく知り、様々な事柄についての的確な判断ができるとされていた。また、人格者でもあるとされていた。しかし、彼らは、「いかに生きるか」という問いを自ら立てる必要はなく、人生を大過なく過していた人が多かった。阿部は、それに対し、「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のためになにができるかを知っている状態、あるいはそれを知らうと努力している状況」こそが「教養」があるとしているのである⁷⁾。

さらに、「世間」についても研究を行っていた阿部は、日本特有の変革を望まず現状をよしとする世間を前提として、教養ある人とは、「世間の中にいて世間を変えてゆく位置に立ち、何らかの制度や権威によることなく、自らの生き方を通じて周囲の人に自然に働きかけてゆくことができる人」と定義している。そして、教養とは、個人単位であり個人が自己の完成を願うということではなく、学を修め社会の中での自己の位置を知り、その上で「世間」の中で自分の役割を果たさなければならぬということであるとしている⁸⁾。

文明開化のかけ声高らかに実行に移された我が国の近代化は、確かに技術面ではめざましい成果を上げた。近代国家の仲間入りをした。しかしその内実は、明治期近代化を急いだ時代も、欧米の近代化の底流に流れる学問に対する基本的考え方（人文学、哲学的思考）を共通の基盤として学問を体系化することはなかった。我々は、中学高校大学教育を通じて知識としての思想・哲学は学ぶことはあったが、自らにそれを問いかけゼミナール形式で教員の指導のもと議論し合うような、米国のリベラルアートカレッジのような教育を受ける機会是与えられていなかった。西田幾太郎や三木清など、我が国が誇る哲学者の著書の存在は知らされたと記憶するが、それを Great Books として認知し読ししなければいけないとする義務感は学舎には存在しなかった。

日本は、文化系・理科系の如何に拘わらず、彼らの持つ近代文明を支える工学的なかたちや専門

性に飛びつかざるを得なかったし、それが社会の流れにも適合した。その後、多大なる犠牲を払った第二次大戦後、その欠点を正す良い機会であった戦後教育の新制度も、アメリカの国家理念たる自由と民主主義という言葉が空疎にも一人歩きを始める。小泉信三が率直に告白しているように、人間の尊貴や人間のその義務の重さについての洞察に欠き、ましてや、どのように教えるかについては、全くその手だてもなく「自由と民主主義の教育」を始めたのである。

(2) リベラルアーツとリベラルエディケーション、そしてヒューマニティーズ

それでは、欧米の基盤にある学問とはどのようなものであろうか。欧米の教育を語るとき、リベラルアーツとリベラルエディケーションという言葉に遭遇する。ギリシャ時代、実業は奴隷が行っていた。奴隷は技術的能力を身につけよく教育され信頼できる存在であった。その上に立つ自由人 (free person) たる市民は、彼らの知識に対抗すべき知識・能力を持つ必要があった。その知識のことを彼らはリベラルアーツと呼んだ。それは実学ではない。専門知識でもない。アテネという民主社会を維持するために市民として必要なものであった。リベラルアーツとしては、少なくともヒューマンスキルとして、正しく説得的に適切で、文法的にも修辭的にも対話的にも優れた話し方をする (speak correctly, persuasively, and cogently—grammar, rhetoric and dialectic) ための科目として、文法・修辭・論理の3科 (trivium) が含まれ、数学・幾何学・天文学が都市国家を經營する意味で求められていた。社会の構成員、つまりは市民としての資質能力を維持し生活するための人間的資質能力。それがリベラルアーツではなかったか。中世に至り、リベラルアーツは職業技術的な色彩を強めるが、当初のリベラルアーツの考え方、とりわけ人間としての生き方という視点は、リベラルエディケーションに受け継がれることになる。

欧米の学問の根底に流れるもの、丸山の言うササラの根に当たるもの、それが、これらによって共有されている欧米の知であり智なのであろう。リベラルエディケーションとは、人間が人間らしく自由に生きるということはどういうことかを理解すること、理解しようとすることであり、そのために、ヒューマンスキルを含め、諸能力を養成することにある。それは欧米文化がギリシア・ローマから営々と受け継いできたシティズンシップの重要な要素である。

多様化し複雑化し一歩間違うと社会から疎外される現代という時代は、専門性に埋没せずに自分の私的な生活空間をきちんと確保するという生き方、はやり言葉で言えば、ワークライフバランスを考えるという生き方が求められる。また視点をかえて、グローバル・コミュニティの一員となった我々は、専門家が発する問いや彼らの説明に対し、彼らを信ずるか信ずべきでないかの判断をするための人間としての常識・判断力も強く求められる。

米国の歴史学者であり教育学者である、S. ロスブラッドも、リベラルエディケーションに関し、一般教育との比較において、「柔軟な心性を意味するブレドス (breadth) を涵養することが、変化する世界を生き抜く人生に向けての正しい教育である。そのときリベラルな科目とは、歴史学的、社会科学的、倫理的そして神学的な視点など、ありとあらゆる観点から、人間の存在状況を照らし出すものである⁹⁾。リベラルエディケーションには、歴史的な連想や歴史的な意味、そして歴史との共振がある。想像力や知性を自由に働かせ、また、宗教の教義、迷信、偏狭な権威が引き起こす奴隷状態からの解放を行うものである。リベラルエディケーションとは、要すれば日常生活における最高の礼儀作法なのである¹⁰⁾」と指摘する。また、彼はリベラルエディケーションの今日的意義として「個人間のコミュニケーションと呼ぶものを含んで広く人生の準備をすること¹¹⁾」をあげ、その特性を次のように提示している。

- ① 自己や自己の各部分からの知的、情緒的解放。ないしは、社会から、もしくは社会や偏見の制約からの解放。
- ② 視野の幅広さ、関係性を理解する能力。つまるところは、重大な決断や判断をなす能力。
- ③ 視野の幅広さ、偏見や先入見からの自由によって生まれる精神の自立。
- ④ 人間の性質、人間の行動、敷衍すれば、制度や基本的な人間の構造の動機並びに根源の理解¹²⁾。

さらに、教育学者、松田義幸は、リベラルエデュケーションについて次のように語っている。

生きるという営みの中で生じる様々な障壁に対してどう対処するのがよいかという判断を、深い教養と真理へのまなざしを背景に、自らの意志で理性的に選び取ってゆくことのできる精神の自由、規律有る自由を意味する。幸福とはなにか、善とはなにか、真理とはなにか、正義とはなにか、美とはなにか、平等とはなにか、などこれらの問題に立ち向かっていこうとする姿勢を身につけること、これがリベラルエデュケーションの目的だ¹³⁾。

また、欧米には古くから単純に言い切るとすればヒューマニティズという学びがある。それは、近代の経験や実験によって実証が可能な社会科学 (social science) や自然科学 (natural science) ではなく、古来人間に関わる学びとして引き継がれてきた (正確には実証性がないので科学とは呼んでいない) 学問である。日本では人文科学と翻訳するが、人文学と称すべきである。英語はヒューマニティズ (humanities) の一語である。科学とは称していない。そしてヒューマニティズの説明は多種多様であるが、大胆に共通項でくれば、それは「共同体の伝統文化を理解・継承し向上させる (人間に関わる)、市民のための幅広い教育を意味した学問」のことであり、近代諸科学が隆盛を極めるなかで、歴史的に継承された学問の立

場を明確にしたものではないかと考える。

なお、我が国でも、哲学者中村雄二郎や心理学者河合隼雄も、科学の肥大化に疑問を提示し警鐘を鳴らしていた。中村は「生きることについて考えること」を基礎づける確実性には、科学と称せられるモノゴトを客観的に捉えようとする認識の確実性と一人ひとりの生き方や考え方に確信を与えてくれる主観的確実性の二種類¹⁴⁾があり、「知」を人間が自分の体験する現実や事実を体系化することと定義して、前者を「科学の知」とした。そして、それは普遍性・論理性・客観性¹⁵⁾には優れ世界を席卷したが、逆にモノからイメージ性や多義性を奪い取り、モノの独立化を行い関係性を失わせ、そもそも有機的に繋がり結びついている人間の全体性を喪失させ孤独な存在としたとして、科学の知には大きな欠陥があると指摘¹⁶⁾。だからこそ、科学の知に対して、後者を「神話的な知」と名付け、その必要性を訴える。神話的な知とは人をとりまくモノゴトを宇宙論的に意味を持つモノであると定義している。そして、中村は、欧州で科学¹⁷⁾と呼ばれているものは、人間の主体性とか自由とは独立した自然界を支配する因果性や決定論や法則性であり、それ自身が制度化していくことに危惧を抱き、とりわけ日本では、このような科学という観念の制度化が進行するなかで、科学が科学自体を固定化・惰性化して使われている¹⁸⁾と強烈な批判を行っている。

河合も中村に共感し、人間に必須の関係性の喪失という現実に対してコミュニティの形成の必要性を唱え、中村のいう二つの原理に賛同している。一つは、現実的要求としての必要原理で、その貫徹が病理を生み、交感原理が必要となり、そして、それは祭り・あそび、演芸と繋がっているとす。さらに、祭りには祭儀と祝祭の二通りあり、祭儀は形式と秩序そのものであるのに対して、祝祭は秩序の転倒であり集団的興奮と亡我にある¹⁹⁾と、その重要性を心理学の視点から指摘している。中村にせよ河合にせよ、科学合理性への知の偏重に対し、それらをつなぐ基盤となるべきものとしての人間本来の学びの必要性を、それ

は古来より日本にも継承されてきているものだと
して、強く訴えているのである。

米国は、19世紀後半に入って高等教育のモデルとしての研究型総合大学が登場、大学院教育、学術研究、専門分化が進み、自然科学の優勢と威信の下に、科学の進歩は必然的に社会の改良をもたらすとの信念（進歩主義の定着）が定着し、高等教育のもつ文化の学問としての統一性も倫理的意味の重要性も進歩主義に劣後するようになる。しかし、社会学者ロバート・ベラーが分析するように、米国ではリベラルエデュケーション（社会全体の主要な倫理的問題について語る古い道徳哲学）の考え方は生き続けた。大学も専門化・細分化、総合大学化の道を歩むが、その中で、教育のリベラルエデュケーション的初心、教育の基本は根底で意識されている。学問の目的は、なお「統合された単一文化を構成し（米国の伝統文化を理解すること）、社会を向上させ（uplifting）、統合する（unifying）影響力をもつ学識ある人（man of learning）を生み出すこと²⁰⁾」と認識されており、そして、大学の最終年次に必修コースとして学長自らが道徳哲学（moral philosophy）を教えたことを米国の教育者は忘れてはいない。その道徳哲学の内容は、科学と宗教を含む種々の学問領域を統合しつつ、個人的・社会的に良い生活（人生）の意味を考えることを課題としていたのである²¹⁾。シティズンシップを身につけることはこのようなプロセスを経ることを必要とし、キャリアデザインの出発点はここにある。

19世紀初頭に米国を旅し米国という国の自由と民主主義のなんたるかを刻銘に描いたアレクシス・ド・トクビルが指摘するように、米国は、人類が始めて生み出した人民主権の国である。人権宣言を高らかにうたいあげた国である。彼らの人間の尊貴に対する意識は高く、人文学とは何かについて、時代の変節期には必ず議論が繰り返されている。米国経済の大衰退期にあたる1980年、経済社会の基盤をなす教育のあり方について、有識者を集め再度人間について、つまり人文学の意味について問い直した。ロックフェラー財団の寄

付も得られ、影響力のある膨大な報告書として結実している。衰退期に入った時期に、自由を合い言葉として生きてきた伝統と誇りをもつ米国人にとって、どのような学びが必要なのかを、時代の変化を考慮して問うたのである。その報告書には、もちろんキャリア形成に不可欠なものとして人文学の重要性が述べられている。以下はその要約である。

人文学は個々人に必要な能力や見識を養う学問である。このことが（欧米人の）信念となっている。この点は（我々日本人こそが）大学教育や専門教育を始めるに当たって肝に銘じておかなければいけない。人文学は、長い人生で積み重ねる様々なキャリアを構築するに当たって重要であるが、それ以上にキャリアを越えて必要不可欠なものとして断言してもよい。……引き続きリベラルエデュケーションに新鮮な意味を与える努力は続けなければいけない。人文学の重要性はこのような努力の過程で強調されなければいけない。それは、人文学が①読み書き話し方能力を高め、②芸術を鑑賞する力をつけ、③他の文化を理解し（他の言語知識の修得による理解が望ましいが）、そして④倫理や公共政策や科学技術の価値についての分析・評価能力を身につけるために必要なメンタルな能力や歴史知識の修得を目指しているからである²²⁾。

人文学は常にリベラルエデュケーションの市民的目的を想起させる。個々人が（自ら）選択し責任を持って行動する能力を修得させることがリベラルエデュケーションであるからだ。これは現代日本人の喫緊の課題である。なぜなら政治や社会に関する情報が（ネットなどにより）瞬時に氾濫する時代で、我々市民は、かつてない複雑で無数に選択肢がある状況の中にあり、その中で決断に迫られているからである。

人文学は、翻訳力（理解力）を求める。そして、コミュニティに参画するために、同時にその

参画がどのような価値があるのかを確認するために、批判力の養成を求めている。人文学のどの分野もシティズンシップ獲得のための教育であると言ってもよい。歴史は現代を理解するための鍵を与えてくれる。文学は人物やその状況や行為（選択）を通じて個人の倫理的視野を拡げてくれる。哲学は真偽や通念（belief）についての分析や分類のルールを与えてくれるのだ²³⁾。

我が国の戦後の驚異的な経済復興も、明治期と同様、日本的な本音を温存しながら、欧米の細分化された専門分野を「建前」として奉り糊塗したものではなかったか。「本音」は日本の伝統精神そのものであり、日本のいう近代化とは、自由や民主主義の出発点である個の近代化を捨象したものではなかったか。単に専門的個別的知識に秀れることをもって教養とされ、教養人と呼ばれる知識層が大きな力を持ち得ず、人間としての真の学問たるものが本来どうあるべきかも問われず、その結果として、時代の潮流に自らが変革に向けて舵を取るには、極めてひ弱な人材しか育たなかったのではなからうか。

もちろん、米国も工業化の流れにリサーチ大学を誕生させ、大学がカフェテリア現象を来した。その行きすぎた専門性・技術偏重の中、テクノクラートという権力機構を生み出したことは事実である。また、科学の進歩を信頼した近代という時代自身が、国民国家の成立と戦争による人間殺戮に帰結したことも事実である。しかし、欧米の近代という歴史を歩んだ彼らは、その事実を心に深く刻み込んで未来を見つめ行動を起こしている。欧州では、20世紀に入ってなお、人文学が人文科学とバランスをとるべきとのコンセンサスが根強く息づいており²⁴⁾、そして、21世紀を迎えるに当たって（1993 EU発足、1998中央銀行設立、1999共通通貨ユーロ導入）、ついに、人類の叡智の結晶とも称しうるEU（欧州連合）という歴史にのこる新しい政体を生みだし、その形を整えつつある。また、米国教育は、個人的キャリア主義に陥り専門性に傾斜しているように見えるが、なお、市民的伝統を継承しようとする多くの教員

がいることも事実である²⁵⁾。黒人大統領オバマを誕生させた文化もそこに起因する。

奇跡とも呼ぶべきこれらの事件には彼らの人間に対する深い洞察があったことを我々日本人は心に刻み込んでおかなければいけないのであろう。日本人としては、うわべの近代化（形や物質面での近代化）に対する深い反省にたつて、今度こそは、真剣に未来を見つめ心の近代化という偉業を達成しなければいけないのであろう。

(3) 大学での学び

現代の若者の悲劇は、謹言実直である官僚が積み上げてきた硬直化した教育システムに閉塞していることである。澆刺として外国文明を受け入れた明治期の若者に比べ、著しく内向きで大人しい。サラリーマン化する社会の中で親の仕事に触れる機会が著しく減少し、身の回りの生活領域にしか関心が向かない。昔は、若い故に世界を夢見ていた。今の若者には、鹿島茂のいう遠方指向性が欠落してしまっている。

大学に入っても、個として生きていくための真のイニシエーション教育（本来は高校ですませなければいけない）は軽んじられ、ひたすら、専門性や資格教育に傾斜する。型にはまったキャリア教育というものが機械的に実施され始めたが、極めて技術的である。社会はステレオタイプの間を求めているわけではない。

若者が大学に入って何を学ぶのか。時代の流れが加速化し情報の氾濫に翻弄されるからこそ、大学時代は、人間そのものを理解し、人生何が大切なのかを思索する時間が必要だ。人間、軸が定まれば、プロフェッショナリティは付いてくる。

経済学者佐伯啓思は、「大学での学びとは、権威ある知識を蓄え総合化することではなくて、自分の感性（感受性）に耳をすますし、事物をありのまま観る力を養うことである。批判的に物事を理解し考える力をつけることである。知識ではなくて思索であり、鵜呑みではなくて疑問をぶつけることであり批判的に物事を捉えることである」

と述べている。福沢諭吉が維新時、独立した精神²⁶⁾を強く訴えた。それは、我々が議論してきた、自主性というマインド・自立という行為・自律するという心の戒、そのものであり、自由人として生きること、人間としての成長とは何かを考察しなければいけないということである。

III. キャリアデザイン学への模索

(1) キャリアとは

キャリアとは、古来様々な意味がある。オックスフォード辞典 (OED 1989) に詳しい説明がされている。そもそも馬のレースに関連して使われる言葉で馬が走る道 (path) のこと、あるいはフルスピードで走ることという意味であったようだ。その後 19 世紀に入り「外交官としてのキャリア (diplomatic career)」や「公的キャリア (public career)」というような使われ方をするようになり、徐々にプロフェッショナルの人生のコース、あるいは雇用されている場合でも、そのプロフェッショナルな点に着目してその人生のコースを意味するものとなった。そして、世の中の的にも進歩や前進の機会を与えるというニュアンスを持つ言葉として使われるようになった²⁷⁾。米国の高名な社会学者ペラーの『心の習慣²⁸⁾』によると、キャリアという言葉は 19 世紀半ばから登場し、「昇進あるいは名誉をもたらしてくれる職業上あるいは雇用上の履歴」と定義されている。

日本でも 1980 年代には既に広く使われていたようだ。広辞苑 (第四版 1991) によれば、当時より、「① (職業・生涯の) 経歴、② 専門の技能を要する職についていること③ 国家公務員 I 種 (上級甲) 合格者で本庁で採用されているもの」と説明されており、熟練した技能をもち第一線で働いている女性としてキャリアウーマンも掲載されている。キャリア研究の魁けとなり多数の著作をもつ経営学者、金井²⁹⁾ は、馬車がたどってきた道程を示す轍のようなものであるとキャリアを喩えている。

(2) 欧米のキャリア研究とキャリアの定義

1970 年代半ばホール、シャイン、ヴァンマーセンの著作が世に出るなど、組織学者の間で研究が進み、キャリア研究は組織学の一分野として確立し (establish)、キャリア理論が学問的に認められる (legitimate)。1989 年、その集大成として、マイケル・アーサ、ティム・ホール、バーバラ・ロレンスの編集により『キャリア理論ハンドブック (handbook of career theory)』が上梓されている。

1990 年代に入り、世界の経済社会環境は大きく変貌を遂げる。キャリア研究の対象も拡大し多様化し、様々な学問分野での関心が高まり、キャリアという言葉が論文などで頻りに用いられるようになり、今日に至っている³⁰⁾。このように諸分野で取り上げられるようになったキャリアに関連する研究に関して、2007 年、経営学会 (academy of management) のキャリア部会の元部会長と発刊当時の部会長、パイパールとガンツが、ハンドブック第二弾として、キャリア・スタディ・ハンドブック (handbook of career studies) を、まとめている。

この間、キャリアスタディにおけるキャリアの定義は、“the evolving sequence of a person's work experience over time (時間の経過とともに進化していく仕事経験の連鎖)” とされ、一貫している。1989 年のアーサとホールとロレンスの提示した、この定義が、本質を簡潔に言い表しており、そして、キャリアに係わる諸事象をあまねくカバーしうるもので排他的でないと評価され、新しいハンドブックの中でも踏襲されているのである。なお、そのときの仕事 (work) の定義は、生計を立てるためのものである (making living) とし、その他の人生の時間を無視はしていないが主たる (primary) ものでなければいけないとしている。

キャリア・スタディ・ハンドブックにより読み取れるキャリアの研究というのは、個と、個に対し主として職を提供できる供給者について分析・

研究するもので、それらを時の変化の中で捉える動的なものであることを大きな特徴とする。組織も社会も常に変化し続ける。そのような時間の経過の中にいる個について、主体的にあるいは客観的に、過去に目を向けつつ将来を展望するのである。英語でいうと、“backward into the future”的に、あるいは、今期私が学部紀要論文で取り上げている reflexive (再帰的) にということである。もちろん、個も変化する。人々が思い描くキャリアの概念も多種多様である。キャリアの研究というのは、単なるキャリアという一つの分野に絞り込むことは難しい。キャリアへの関心が日々高まる今の時点では、キャリア研究とはキャリアに関して社会が懐く様々な問題についての分析・研究の遠近法的なキャンパスへの投射のようなものである³¹⁾と解釈すべきかも知れない。

(3) キャリアデザイン学への模索

人間に自由が与えられ、人間が人と人との関係性の中で生きていかなければいけないとすれば、そして、社会の一員として何らかの役割をはたさなければいけないとすれば、それは、過去の経験を生かしつつ将来に向けて個々人がよりよい選択を目指して、選択を試行錯誤的に行うことにより、自己を変革し、人生の質 (QOL) と同時に生活の質 (QOL; quality of life) の高い、より良い社会の実現を目指すべきであろう。

キャリアデザインとは、このような重要な人生の選択を、キャリアという視点で、言い換えれば (市場システムという現実の中で) 社会のリソースとしての自分の価値を考えながら、如何に行うかということである。現在の日本の状況のなかでは、時代を正しく認識し日本人を相対化した上で、各人が自分のキャリアを考察 (デザイン) することが重要である。個人のキャリアを考えたとき、一人ひとりが個を確立し、その個によって社会 (集団、組織、コミュニティ、社会、国家、国際社会) にコミットメントすることが、我々にとって未だ喫緊の課題であると思われる。またそ

のような確立された個によって個が社会のなかでキャリアを形成するときというとき、デザインという意識が不可欠であると考えられる。そして、個と集団は或いはその関係は確たるものがあるのではなくて相互に影響しながら動的に変化していくものである。

従って、キャリアデザイン学とは、「より良いキャリアデザインとは何か」を常に自問することにより人生を生きることが自己変革に繋がり、それが良い組織、良い社会にも繋がるのではないか、という問いかけに対し応えるための学問であると思われる。

キャリアデザイン学の構造としては、その構成要素を個と社会 (集団、組織、コミュニティ、国家、国際社会を含む) とし、その上でキャリアの範囲を確定し、個が変容し、また個と社会が相互に影響しつつ動的に変化することを前提として、個と社会にとっての「より良いキャリアデザインとは何か」を考えることになろう。キャリアの範囲には、ビジネスキャリア (職業生活の場) のみならずライフキャリア (生活コミュニティの場) や職業とはいえないような贈与活動に係わる仕事や、もちろん、雇用されるだけでなくみずから仕事を創造する自営やベンチャーも含める。従って、キャリアとは仕事という切り口で見た人生そのものともいえるのである。

キャリアデザインする対象者は特に限定せず一般の人である。キャリアの分類についても特段の制限は設けない。組織内キャリア、組織を越えたキャリア (boundaryless) 国境を越えるグローバルキャリアも対象とする。

キャリアデザインのイメージは、変わりたくない自分・なかなか変わらない自分 (homeo-stasis) と再帰的に前進しようとする自分との相克であり、それでもなお自分で何とかしようとする (self-manage) 哲学的な営為でもあり、あるいはまた、外から見える客観的なキャリアとその自分を主観的に眺めている自分の二重性でもあり、さらには、より動的に自分が動くこと (self-designing) により社会が変わっていくプロセスでもある。と

りわけ、若者にとっては、不確かな未来に立ち向かうためのレディネスをつくること、それはとりもなおさず、人生という未来に立ち向かう覚悟やチャレンジ精神を涵養することであり、社会化するための知識やスキルを身につける努力を日々行うことでもある。

キャリアデザイン学の実践的目的となるべき「より良いキャリアデザイン」とは、個や組織・社会などに何らかの価値が生じることなのであろう。それは、①経済的に報いられること、②組織変革につながることに、あるいは③その両方を満足しなければいけないのか？そして、④報われることが良いことなのかどうかという基本的な問題もある。さらに、厳しく⑤最終的に社会が良くなるか、個は価値を見いだしたといえないのかも知れないし、⑥その時、そこには、個の自己実現や人間性実現と関連するものが含まれていなければいけないのではとも思う。いずれにせよ、⑦これらの積み重ねが社会変革につながると考えたいのである。

その場合に個に照準を当てたとき、個人的価値からみてキャリアをより良くするには、①自由になることや②個を確立すること、③秩序感・道徳観をもつこと、④自己利益(enlightened interest)である自己変容や社会利益につなげるための行動様式として friendship、entrepreneurship や stewardship をもつことなどが必要である。そして、その個は、基礎知識として人間認識・社会認識・時代認識・日本人認識などを持つこと、同時にマインドセットとして夢や目標を持ち当然のことながら計画し選択し成長することが求められる。それらがキャリアをデザインする能力だともいえるし、そのような個がキャリアデザインする個だともいえる。

もちろん、その前提には、我々のコンセンサスとして人間は変容しようということ、昔に比べれば社会的制約が少なくなり自分の人生を自分で軌道修正できる環境になりつつあることがあろう。

キャリアデザイン学としては、何時デザインするのか、さらにはキャリアデザインの技法などの

問題があろう。戦略的・戦術的・戦闘的・トランジション的場面設定や、人間としての成長過程としてキャリア準備期である学齢期までの期間や、キャリア決定・充実期である青年期や成人期、そして、究極期である老年期などの期間設定の問題もあろうし、個における局所的合理性のもとでの選択と修正 (PDCA) のプロセスやキャリアの空白期間などの設定やあらかじめポートフォリオを準備する方法などの問題がある。いずれにせよ、個においては、自己と社会(集団、組織、コミュニティなど)との相克に悩むことになり、それらの状況に対処するための問題意識、覚悟性、こころの持ちよう(最後のところは、やってみなければわからないといったマインドセット)、行動様式、ペルソナの使い分け、そしてスムーズにことを運ぶためのヒューマンスキルなどのテーマもある。やや大袈裟かも知れないが、自分の人生・社会・自然をも包含したある時空間のなかで自分のキャリア人生を発想するのであるから、デザインするときの秩序感覚やバランス感覚(日本人的には美意識)などの研究もあり得るだろう。また、自分のキャリアデザインを修めることは他者のキャリアデザインに関連しサポートやケアを行うことも可能とするが、もう一つの重要な研究分野として他者との関わり合いに関するものも含まれることになる。

最後にキャリアデザインした結果に対する価値判断やデザインできない場合などの不確実性の問題も残る。前者はキャリアをコントロールすることが可能な部分についての認識や組織変革や社会貢献などの問題であり、後者については、失敗することにも価値があるとすべきと思うが、不確実性の中での心の持ちよう(open-mindやplanned-happen-stance)や目標達成後の態様などの問題があろう。

これらをまとめると、全く試論であることを再確認して頂きたいが、キャリアデザイン学とは、人生における個々人の選択の中でも極めて重大なキャリア(ビジネスキャリア、ライフキャリア)の選択という行為に照準をあてて、現下の激しく

変化する時代を認識し、その主体である日本人という個の問題、そしてその個と社会とが織りなす関係性の問題を動的に扱うもので、対象とする社会とは、組織(縦)、コミュニティ(横)、境界を越える世界(グローバル化・バウンダリレス社会)に確定し、その主体のキャリア選択が社会にとって良い変化をもたらすことを目標として、個と社会にとってのより良いキャリアをデザインするとは何かを考察することにあると考える。それは、個の価値・意味、個の自由と善の関係、個と社会的価値との相克などの問題を踏まえ、「より良いキャリアデザインとは何か」に向けた、個、心理、組織、共同体、政府や社会、文化、教育、経済、政治など多方面からの研究の融合体となるものである。

(4) キャリアデザインという学び

キャリアデザイン学部で学ぶということは、一年生の内に現代という時代を生き抜くために、マインドをリセットし、新しい自分に脱皮すること。そして人が自由に生きるとはどういうことなのかを考えることである。他人に迷惑をかけない範囲の自由(消極的自由)を理解し、自主的に行動するすべを学ぶことだ。それは、古来ギリシャローマの時代より継承されてきた、リベラルアーツを身につけることであり、自由に生きることを生涯模索する欧米のリベラルエディケーションの思想そのものである。現代のリベラルアーツを身につけ日本におけるリベラルエディケーションを実践するキャリアデザイン学部で学んだことを誇りに思っている。単なる自己の向上(self-enhancement)ではなく、自分の、あるいは他者の、人生を構築する能力(life-enabling)を養ったのである³²⁾。

そして、私の考えるキャリアデザイン学を踏まえば、キャリアデザインという学びは、次の通りである。

- i) 自由が解禁され、自由という不自由と職業選択という労苦を背負って生きていかざる

を得ないことを理解する。

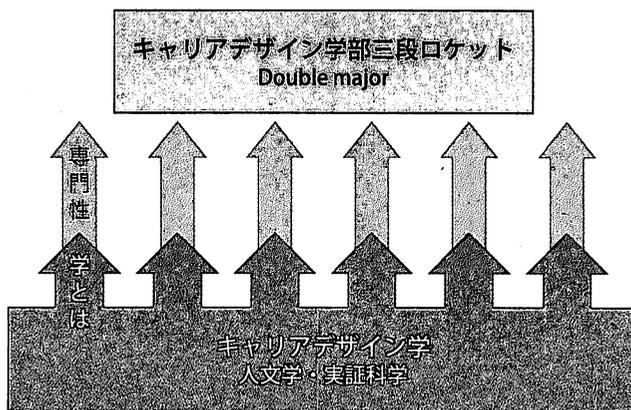
- ii) 自分の社会化、より社会の現実近づき、自らの生きる力を高めると同時に他者の生き方を支援する力を身につける。
- iii) 激動する今(不確実・不安定)という時代を認識する。
- iv) 疑問をいざくことのなかった日本という「くに」のかたち、日本人という2千年の歴史を背負った民族性を再考する。
- v) 「このままでよいのだろうか」と常に生涯に亘り問いかける態度を身につける。
- vi) 限りなく自立し自律する(外の権威に染まらず自ら描いた権威を人におしつけない)。
- vii) 日本で展開されている諸学問についても、そもそもその学問が何であるか、人間にとってどのような意味を持っているのかなどを自分なりに理解し、そして、横串的に批判的に学び、高みにいる自分からの見方を忘れない。
- viii) 他者との関係性(rapport)を強く意識しながら(他者理解)、共感(empathy)・寛容(inclusivity)という人間の感性を磨き、これからの人生という航路を想像し準備する力(readiness)を涵養する
- ix) そのような人材には専門性という柱を時代に合わせいつでも埋め込むことが可能だ。とりわけ、キャリアデザイン学部の多様な教員からは、キャリアや人材をキーワードにした、時代が求める専門性に触れることができる。人材マネジメント、キャリア教育・社会教育、人材育成、キャリアカウンセリング、多文化共生、マーケティングビジネス、文化とマーケティング、組織心理、文化アートビジネス、起業マネジメント、などなど、である。

米国ではダブルメジャーという学び方を良く耳にする。私が米国で学生インターンを受け入れた時、面接でダブルメジャー(double major)という返事をもらったことがある。二つの専門を学んでいますということだ。

中学高校でインプットされた価値観をリセットして、澄んだ心にキャリアデザインの学び（キャリアデザイン学）を一二年生のうちに修める。その時他の学問分野について、そもそもその学問は何であるかを考察し自分なりの考え方（法学観・経済学観・社会学観など）をもつ努力をすることが大切である。二年の後半からは関心ある分野の絞り込み、専門性の柱の一つ見つけて欲しい。「私は、ダブルメジャーです」と誇りをもって宣言し

てもらいたい。アメリカの学生のように。もちろんそれなりの勉学と研究と乗り越えなければいけない大きな壁としての卒論があることは大前提だ。図で示すと、キャリアデザイン学の基本的考え方を修め、伝統的な学問の意味を問い、その上で自分の関心領域において専門性を極める。キャリアデザイン学と専門分野のダブルメジャーとなるのである。

(図3)



授業の最後に、30代でキャリア官僚に見切りをつけベンチャーに飛び込んだ起業家に登壇してもらったことがある。「自由とは自分ゆえと書く、夢は、持たなければ実現しない。自分軸をつくれ」。100人余の受講生を10分間で魅了した。自分の意思で前向きに生きるキャリアデザイン観をさわやかに宣言してくれた。彼は成功をおさめ、社長業が彼のキャリアになった。その後もいくつかの企業の社長（CEO）を引き受けている。

— 注 —

- 1) 阿滿利磨『日本人はなぜ無宗教だったか』（ちくま新書1996）p122
- 2) ジムグント・パウマン、奥井智之訳『コミュニティ』（筑摩書房2008）p60
- 3) 小池靖『セラピー文化の社会学』（勁草書房2007）p19

- 4) リベラルエディケーションを理解する戦後教育界の重鎮（1888～1966）で欧米事情に詳しく、今上天皇の教育掛、慶應義塾の塾長を歴任、専門は経済学。
- 5) 『自由と規律』（岩波新書1949）の序文（小泉信三）より
- 6) 丸山真男『日本の思想』（岩波新書1961）p132～134
- 7) vii 阿部謹也『教養とは何か』（講談社現代新書1997）p55, 56
- 8) 同p179,180
- 9) S. ロスブラット、吉田文・杉谷祐美子訳『教養教育の系譜』（玉川大学出版部1999）P54
- 10) 同P105, 106
- 11) 同p52
- 12) 同p155
- 13) 松田義幸他『グレートブックスとの対話』（財団法人かながわ学術研究交流財団1999）p70

- 14) 中村雄二郎『哲学の現在』(岩波新書1977) p10
- 15) 中村雄二郎『臨床の知』(岩波新書1992) p129
- 16) 河合隼雄『ブックガイド心理療法』(日本評論社1993) p13
- 17) 科学という言葉は、歴史的には、日本語では百科の学、あるいは独のヴィッセンシャフト(但し大学で行われる全ての学問)の訳に由来すると言われている(中村雄二郎『臨床の知』p25,26)。また近代科学は自然科学から出発するが、社会現象についての様々な考察が社会科学として経済学・政治学・社会学・社会心理学などといった順で分化し独立したとしている(中村雄二郎『哲学の現在』p22)。
- 18) 中村雄二郎『臨床の知』p259
- 19) 中村雄二郎『哲学の現在』p189~195
- 20) Bellah et al. "Habits of heart" (University of California Press 1985) p298
- 21) Bellah et al. "Habits of heart" (University of California Press 1985) p298
- 22) "The Humanities in American Life : Report of the Commission On the Humanities" (University of California Press) p69
- 23) 同 p70
- 24) Robert Bellah "The good society" (Vintage Books 1992) p162
- 25) Bellah et al. "Habits of heart" (University of California Press 1985) p293
- 26) 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波文庫
- 27) a course of professional life or employment, which affords opportunity for progress or advancement in the world.; Hugh Gunz · Maury Peiperl "handbook of career studies" (Sage Publications 2007) p3
- 28) ベラー他『心の習慣』(みすず書房1991) p144
- 29) 金井壽宏『働くひとのためのキャリアデザイン』(PHP新書2002) p27
- 30) キャリアハンドブックの編者 Gunz & Peiperl (2008) は、多々ある学問領域の中で、厳選して次の9つの分野について説明を加えている。
- ① 社会学者は世代間移動と社会的な視点から生涯の変化を分析することに関心を持っている。後者に関しては、管理職のある立場の個人がどのような社会的起源 (social origin) や人口統計学的な属性を持っているかを分析し、ビジネス・エリート の構造や行動を明らかにする。
 - ② 組織研究の人口統計学者は、昇進率と移動を決定する要因を研究する。
 - ③ 労働経済学者は、企業内そして企業間の労働市場の構造を研究する。
 - ④ 組織論の研究者は組織内そして組織間のキャリア構造について研究する。
 - ⑤ 発達心理学者は、個人が辿るライフ・ステージを検証している。
 - ⑥ 教育心理学者と職業心理学者は、主に育成とカウンセリングを検証する。
 - ⑦ 心理学的社会心理学者は、個人が経験し仕事経験とパターンと個人が連続的にそして並行的に経験する役割の相互作用に関心がある。
 - ⑧ 社会学的社会心理学者は、様々な社会のキャリアに関する比較研究と新しい組織形態が先進国のキャリア形成に及ぼすインパクトに関心を持っている。
 - ⑨ 戦略論やファイナンスの研究者は、経営上の履歴 (managerial background) が企業の戦略的行動や資本市場での経験に及ぼすインパクトについて探る。
- Hugh Gunz · Maury Peiperl "Handbook of career studies" p3、邦訳に当たっては、林洋一郎、キャリアデザイン学部紀要09/2を参考にしている。
- 31) "Handbook of career studies" 同 p4
- 32) "the good society" 同 p176